

2025(令和7)年度
総合文化学部・地球市民学部
一般入学試験問題
国語
12時～13時

受験についての注意

1. 試験開始の前に、以下の注意をよく読んでおくこと。
2. 試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。
3. この冊子の問題本文は **15 ページ**、問題は **3 問** である。試験開始後問題を確認し、落丁・乱丁の箇所があるときは手をあげて交換を求めること。
4. ㊦～㊨の問題は、次のとおり解答すること。
 - ・㊦は**両学部全領域共通の必須問題**である。全受験者が解答すること。
 - ・㊧と㊨は**選択問題**である。㊧または㊨のどちらか一方の問題を選んで解答すること。
 - ・㊦と㊨の **2 問**、または㊦と㊨の **2 問に解答**すること。
5. 解答用紙は、すべて**H B の黒鉛筆**または**H B のシャープペンシル**で記入すること。
(万年筆・ボールペンなどを使用してはならない。)
6. 解答用紙は、マーク式と記述式の二種類である。試験開始の前にマーク式解答用紙の定められた位置に氏名及び受験番号をマーク及び記入し、記述式解答用紙の定められた位置に氏名及び受験番号を記入すること。
7. 解答は、解答用紙の指定された場所にマークまたは記入すること。余白、裏面には何も書いてはならない。問題冊子の裏表紙の下書き欄は、自由に用いてよい。
8. 試験時間中に無断で退場することはできない。
9. 終了の合図があったら、ただちに筆記用具を置き、解答用紙は表を上にして置くこと。この冊子(試験問題)は持ち帰ってよい。

一
次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。〔40点〕

否定は肯定の反対だと一般に考えられている。しかし、論理学ならいざ知らず、日本語においては、否定は必ずしも肯定とは対照的な関係にはない。「もうあまり時間がない」ということは、「まだ多少は時間がある」と等価で、「ない」ことは同時に「ある」ことを意味する。「ない」がもし完全な「無」のみを意味するのなら、「あまりない」とか「かなりある」などと、そのなさに程度性を設けることなどできないはずである。日本語の「ある」「ない」は、話し手の視点でとらえた判定判断にすぎず、外なる同じ対象でも、判断いかんで「あまりない」と見たり「多少はある」と感じたりする。要するに、己の主観的把握次第というわけだ。そして、これと同じことは、何も客体界の事物に限ることではなく、自身の心中の思考そのものにおいても見られることで、たとえば、十分お礼の気持ちがあるにもかかわらず「お礼の申しようもございません」と否定形で述べたり、夫のいることが強く期待されている折に「あなたがいないと駄目なの」と、これまた打消し形で表現する。このような言い方を¹負相表現などと呼んでいるが、否定することによって、かえって肯定形で述べるよりも強い主張の心が込められるのである。一つの言い回しにも似た現象が見られる。「²努力するにやぶさかではない」とか「³かけがえのない人」とんでもないことに、なってしまった」など、負相表現で裏側から肯定表現を行ない、表現効果を高めているといつてよいだろう。これは、逆の肯定形で、強い否定の気持ちを相手に伝える表現方式と対をなしている。嘘をつくなどの意味で「嘘つけ！」と言ったり、「やれるものなら、やってみろ！」が結局のところ、やるんではないぞ、を暗示するなど、例は多い。「³転ばぬ先の杖」とか、「雨の降らない前に帰りましょう」など、文字通りに解釈しては意味をなさない否定の形式も、そのようにならないことを強く心に願う気持ち、逆に形式的な否定表現を取らせていると解釈される。

このように見えてくると、どうも日本語の否定形式は、必ずしも発想からいって、事柄や叙述内容の打消しといった

論理一辺倒のものではないということがいえそうである。というのは、日本語には形のうえでは「ない」となりながら、発話の真意は否定でも何でもないという叙述があまりにも多すぎるからなのである。

たとえば、相手に同意を求める気持ちから「そうじゃない？」と言ったとすれば、これはまさに「ね、そうでしょう」と、こちらの意見をやんわり示して認めさせる、肯定的な内容といふべきである。「私のバッグ知らない？」といい、「それ、あなたには少し難しくないかしら？」といい、いずれも「知ってるでしょう」「難しいでしょう」と、否定で問い掛けて肯定的内容を伝える、いわば反語ともいふべき発想方式を取っている。それだけに端的に述べるのに比べてはるかに含みの多い情意性に富んだ表現となっている。相手に否定的に問い掛けると見せて、実は肯定判断を引き出させるこの種の言い方は、日本語では極めて発達していて、さまざまな発話のパターンを生み出している。「そろそろ始めない？」「コーヒーでも飲んで行かないか？」の勧誘形式。「明日また来てくださらない？」「早くお正月にならないかなあ」の希望や願望。さらには「冗談じゃない！」「素敵じゃない！」「感情を高ぶらせる詠嘆表現。これは「冗談でしょう」と同意を求める、先の反語的発想と A いる。その他、「ここのお宅、留守なのではないかしら？」「もうじき返事が来るんじゃないか？」の推量から、発展して、「こちらのほうが宜しいのじゃないかしら」「あの外国人、刺身が嫌いなんじゃない？」のような念押ししないしは婉曲的な物言いへと、「ない」を伴う言い方は果てしなく広がっていく。

否定は文の中で一回とは限らず、二度、三度と繰り返して重ね用いる場合もある。それだけ発話者の表現心理が屈折して、二重、三重の含みを帯び、肯定形では表わし得ない話者の情意を含意させる結果となる。たとえば「だから、言わないことじゃない！」と聞いて「言ったとおりでしょ」の意味に理解する。と同時に、話し手の抱くもどかしさや心のいらだちが、プラスアルファの形でその発言に影のように添っていることを感じ取ることだろう。「するもしないも、ないじゃないか！」つまり当然「しなければならぬ」ということだが、「ない」を何度も繰り返すことで、ど

うしても拒否できない追い詰められた心理状態、焦りに近い気持ちを実に巧みに映し出しているといえないだろうか。

否定の形で言葉を濁したり、時には言外に否定的気分を匂わす技法も話し言葉にはしばしば見られる。「行かないこともないが……」「君の言うこともわからないではない」と二重の否定で断定をぼかし、曖昧性を残す。結果として推量的気分の婉曲表現となっていく。「行かないこともないが……」は「行くかもしれない」と内容上は等価だし、「わからないではない」は「何となくわかるようだ」と一応は置き換えられる表現である。しかし、二重の否定で表わすことによって、それと端的に表わすところを、再度のクッションを設けることとなり、表現面でのきつさが消えて、情意性がにじみ出てくる点を見逃してはならない。言外に否定的気分を匂わす技法としては「できることなら、そういたしたいのですが……」あるいは、人によんどころないことを頼まれて、言下に断わることもならず「考えておきましょう」と断定を避ける、あの返答のやり方がそれである。日本人は、これまでも随所で触れたように、己の縄張りの内なる相手と、外の人間とを区別する。内扱いの相手には心の内を率直にそのままぶつけることも許されるが、外の人間に対しては言葉にクッションを設けて、できるだけ断定的態度を避けようとする。そこに推量や婉曲・臆化^{ろうか}（ぼかし）の表現が生まれる素地があると考えるとよからう。これらの表現技法は人間関係を和らげ、コミュニケーションを円滑にする一種の潤滑油として重要な役割を果たしているというべきである。

（森田良行『日本人の発想、日本語の表現』より）

（注）○客体界——意識から独立して存在する外界のこと。

問 1 傍線部 1「負相表現」にあてはまるものには①、あてはまらないものには②をマークせよ。

ア 忘れられない味

イ 届かない郵便物

ウ 並々ならぬ熱意

エ 心ない一言

オ 間違いない人選

問 2 傍線部 2「努力するにやぶさかではない」の意味を次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① 少しは努力する

② 積極的に努力する

③ できれば努力する

④ しつこく努力する

⑤ 後で困らないよう努力する

問 3 傍線部 3「雨の降らない前に帰りましょう」は本来どう表現するべきか、書け。

問4 次の文は傍線部4「反語ともいふべき発想方式」について説明したものである。 a c には「肯定」「否定」のいずれかの語が入る。「肯定」は①、「否定」は②をマークせよ。

聞き手に a 的に尋ねることによって、ただ単に b 的な内容を伝えるよりも含みを多く持たせ、こちらの意見を婉曲的に示すことができるため、聞き手から c 的な判断を引き出しやすくなるという発想方式。

問5 A にあてはまる最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 狭軌として ② 軌道をたどって ③ 軌を一にして ④ 軌跡になって ⑤ 常軌を逸して

問6 傍線部5「結果として推量的気分の婉曲表現となっていく」とあるが、この婉曲表現にはどのようなはたらきがあるか、解答欄に合わせて三十字以内で書け。

問7 右の文章の内容と合致するものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 日本語の否定表現で論理学上の肯定の反対を表わすことは不可能である。
② 日本語は縄張りの内なる相手との関係を重視して断定を避ける表現を用いる。
③ 日本語で自分の意見を主張する時に婉曲や推量を使うと相手に内容が正確に伝わる。
④ 日本語では否定表現で肯定的な内容を強調し肯定表現で否定的な内容を表わすことがある。
⑤ 日本語で二重、三重に否定を用いるときは文の意味を曖昧にして内容を誤解させようとしている。

《次の〔二〕と〔三〕の問題は選択問題である、〔二〕・〔三〕のどちらか一方を選んで解答せよ。なお、記述用解答用紙には選択した問題に○を付け、かつマークシートにはマークせよ。》

次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。〔30点〕

二

夏の終りに、北と西に嫁いでいる長女と次女が、互いの家族を連れて実家に寄り合った。都心からは電車で一時間余り、郊外に住む両親への平素の沙汰無しの詫^わびを、久々に夕べの食卓に示したが、二人だけの暮しに慣れている老夫婦は、ひとつ屋根の下に突然大勢の者が集っただけで調子を崩した。娘や孫達^{たち}のやさしさが、そのまま暴力にもなり得るのを互いにそつと嘆きはしたものの、客が一斉に立ち去ると、何とはなしの安堵^{あんど}にもさびしさが滲^{にじ}み、普段から口数の少ない夫婦はいつそう静かな夫婦になった。

老人は、夕陽^{ゆうひ}に染まった庭木の蟬^{せみ}の声に耳を傾けながら、下草の翳^{かげ}りに目を遣^やり、さき頃から何かに急^せき立てられているような自分と向かい合っていた。

（中略）

娘達が来る三日前は、老人の定例の会社日であった。

朝がよく晴れていた。見上げるだけで老人の目は潤みそうだった。今日も日中の温度は高くなるだろう。老人は鉢植^{はちえ}への水も多目に注いでおいた。定例といっても月に二度、午後に開かれる約二時間程度の会議への出席が義務づけられているだけで、そのあとの夕食会への出欠は自由であった。

長年勤めた会社の役員に**抜擢**^{はつてき}された頃は、当然のように多事多忙をこなし、それが生き甲斐^{がい}にも思われたが、やがて定年制の枠の外での勤務、待遇になり、それも今ではごくゆるやかなものに変っていた。思いがけない入院と退院があつてから、老人はそれまでの会社の待遇に甘んじ続けるのを辞退したが、社長の意向でそれは**斥け**^{しりぞ}られた。

辞退したにも拘らず^{かかわ}その関係が会社側から積極的に維持されているのは、恩情の慰労だけではなく、会社側が歴^{れき}とした役割を今なお認めている証拠だというのが次女の夫の意見であつた。自分も将来そういう扱いを受けたいものだが、企業の冷酷を思うと、第一、定年までひとつ社にいられるかどうか、と彼は素面^{しらふ}の時に一度ならず義父にそんなことも打ち明けた。

いつものように早目の迎えの車で都心に向かう途中、老人は運転の人に、十分ほど寄り道をしてくれないかと頼み、自分が書いてきた略図で道順を示して、ある会社近くの駐車場に車を導いた。温度の差を警戒して車の冷房を弱くしてもらつていたので、扉の外に立つた時吐き気や胸苦しさを感じるようなことはなかったが、一瞬、足許^{もと}の舗道が揺れたかと訝^{いぶ}るような緊張はあつた。

彼が訪ねたのは大学時代の友人で、主な用は、共通の友人の七回忌の相談であつた。共通の友人は、老人が最も心を許した友達で、年に一度の彼との旅は、それぞれの会社にあつての働きざかりの時期にも途絶えることはなかったし、互いに閑職に就いてからも続けられた。ただ一度、入院した年を除いて、盃^{さかずき}を交してこれほどよい酔い心地になれる友人は他にいなかった。酒の肴^{さかな}の好みは自分と一致していなくても、酒を丁寧^{たの}に愉しみ、その芳香、美味を無双のそれとしてよろこぶ友人のよろこびようには、自分の知らない過去をもふくめて、彼の歴史のすべてがこめられているのを疑わず、その歴史は多くの労苦、苦渋を積んでいても、少しも卑しくないと感じられるのが何よりの魅力だった。老人の妻は、夫の旅が終つたのを心から気の毒に思つた。しかし、自分が代つてつとめられることでもないのだ、ただひとり気の毒に思ふばかりであつた。夫と親友との最後の旅は、早春の比叡^{ひえ}だつたと聞かされている。

(中略)

冷え込みが続いて、庭木の黄葉や紅葉がすすんだ。雲が空を覆って、夕方にはまだ間があるのに仄暗い。

特別の用か吹き降りでもない限り、老夫婦は午後の散歩を欠かさない。ステッキを持った老人のあとを、少し遅れて狭い歩幅で妻が追う。大抵の時、途中で妻は夕餉の買い物に回る。帰宅するとまず日本茶の用意にかかる。

先に帰って部屋着に着替えている夫は、食卓に読み残しの新聞を拡げたまま妻の茶を待つ。会話はほとんどないが、二人の行動はほぼ規則正しい。夏の終りに二た晩泊って行った長女からは、早い冬支度と家族の様子を伝える長い便りが届き、次女は、今年の蜜柑を期待してほしいという葉書の隅に、お母さんの眼鏡の度合わせをして下さいと書き添えていた。

妻が夫の湯呑茶碗を熱湯で温め出した。

夫が新聞を折り畳む。

湯が捨てられた。

夫の茶碗に急須を傾けながら、澄んだ香りの漂う中で妻が突然口をきった。

「過ぎてしまえばお話ですみますけれど、あの時ばかりは、離婚していただこうかと思いました」

妻の目は急須の口から茶碗に注がれたままである。いつものように腕を組んで妻がつぎ終るのを待っていた夫は、この突然に一瞬息を詰めた。妻の目許を探った。用心して咄嗟の言葉だけは呑み込んだ。「あの時」のひとことで通じるものが、この二人には、あった。

妻に格別不満があった訳ではない。むしろ安心が油断になっていたのかもしれない、と夫は振り返る。しかし理由は何であれ自分も又ただの男に過ぎなかったことをひとりの女に知らされ、長くも短くもあった幻のような時が過ぎ

て、女はやがて帰るべきところへ帰って行つた。

実際、あの時以来、妻はそのことには一切触れず、夫もひとことの言い訳もしないままで長い年月を重ねていた。危い場所に近づきかけているのに気づくと、A。口にして責め立てず、釈明せず、それでようやく保たれてきた年月であるのを夫も妻もよく心得ていた。妻は、あの時のことに触れないのは、自尊心のためばかりではないと思つてゐる。夫も、自分が釈明しないのは、面目のためばかりではないと思つてゐる。その余白に助けられ、同じ余白に不安を抱き続けたまま互いの時を歩いて来た。

静かに暮してはいても、二人には、心のどこかで別々に渡つてゐる綱があつた。したがつて、平素は無口な妻から、自分が会社で多事多忙をこなしていた頃の決意を初めて聞かされた夫は、不意をつかれながらも、あの時のことがこいうかたちでついに話題に出来るようになったかと安堵する気持もなくなつた。

「本気か」

わざとぶつきら棒に言つた。

「はい」

その声の強さは前と変らなかつた。

しばらく二人の沈黙が続いた。

つぎ終つた妻が夫に茶碗をすすめ、夫がゆつくりと最初の一口を飲んだ。

「そうか。お前も矢張り女だったか」

照れ隠しのような明かるい声で笑つた。妻も笑つた。夫でさえ減多に聞くことのない笑い声だつた。

妻の珍らしい笑い声に、老人はふと勢いきおいを得た。

老杉の木立に霧の流れる比叡の奥、西塔の駐車場からにない堂へ向かう山道の右下に、見過しかねない銅板葺屋根いたぶき

の小さな堂がある。椿堂^{つばき}。亡くなった親友との最後の旅で訪ねたのはここだった。

堂のすぐ左手に椿の木がある。山の春は遅いけれど椿の花の盛りはとうに過ぎて、わずかに残った紅がただ二つ、三つ、つややかな葉の繁み^{しげ}から、目を射るような鮮やかさで冬の終り^{おわ}を告げていた。下草の間からのび上った蔓草^{つるくさ}が、並び立つ杉の古木の幹を抱き、音という音が、巨大な筒状になって無限の天空に吸い上げられてゆくような冷たい森閑にいて、重なり合う深山の緑に支えられた残りの花を、この世のものかとながめたことに老人は今も満足している。あの花を妻に見せたい。あの堂の前に、妻を立たせたい。かねてからそう思っていた。友人はなぜそこに自分を伴ったのか。根本中堂^{こねちゅうどう}にも釈迦堂^{しやくかどう}にも寄らず、にない堂近くの苔^{こけ}を賞^めでて山を下りて来た。途中の高みで「かつこう」と啼^なく鳥の声を聞いた。

この旅のあと、老人は行く先々に椿堂の花を見るようになった。比叡^{ひゑ}の奥の、それも咲き残りの椿を見るようになった。少し早い妻の衰えは自分のせいかもしれぬ。それとなく気にしていた老人は、許^{うら}しとも怨^{うら}みともつかぬ妻の笑い声に勇気を得た。年が明けたら、寒さのゆるむのを待ってぜひ比叡に行こう。自分が稀有^{けう}の美しさと見たものを妻とともに見る時を思うと、久々に気持が上向いた。言葉はいらない。深い詫^わびも、いたわりも、共にそこに立つことの中にこめたいと思った。

次の日の夜明け、老人に発作^{おん}が起^{おこ}った。

薄れてゆく意識の中で、彼は **B** と **C** の笑顔を見た。

（竹西寛子『椿堂』より）

問 1 傍線部 1 「平素の沙汰無しの詫^わび」とあるが、ここでの「沙汰」の意味として最も適切なものを次の ① ～ ⑤

の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① うわさ ② 贈り物 ③ 音信 ④ 興味 ⑤ 世話

問 2 傍線部 2 「何かに急^せぎ立てられている」において、作者は「何か」と書いているが、読者に「何か」が何なの

かを考えさせるように書いている、と考えられる。その場合、

I 「何か」は何なのか、右の文章全体から考えて答えよ。

II 傍線部 2 の前に、「何か」を暗に示すための言葉がある。その言葉を二字以内で三つ、抜き出して答えよ。

問 3 傍線部 3 「歴^{れき}とした」の意味として最も適切なものを次の ① ～ ⑤ の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 変わらない ② 立派な ③ 特殊な ④ 名目的な ⑤ 有意義な

問 4 空欄 A に入れるのに最も適切なものを次の ① ～ ⑤ の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

① お互い急いで道筋を変えた

② 自尊心と面目の争いになった

③ 立ちすくんでしまい、何もできなくなる

④ 手を取り合って駆け出した

⑤ ともに自分のことしか考えられなくなった

問 5 空欄 B、C に入る人物は誰と誰か、答えよ（順不同）。

三

次の文章は、室町時代に成立した『岩屋の草子』の一部である。姫君は、実母を亡くし、継母に疎まれていた。父と共に船で九州へ下る途中、瀬戸内海の明石の浦の岩場に置き去りにされてしまう。以下の文章を読んで、あとの設問に答えよ。〔30点〕

さて、姫君は巖いははの上に五日までぞおはしける。潮アの干る時は元の巖なり。また満アつる時は御髪の上まで波ぞ越して洗ひける。恐ろしさ、悲しさ、¹「なかなか海へ沈めたらば、かかるうき目は見じや。この世一つの事ならじ。前の世さきにいかなる罪ををか作りて、かかる身とはなるらん。満ちくる潮に引かれて、この度は海へ入りなん」と思ひ設けておはする所に、母御前の御声と覚えて、²「命絶たなんと、な思しそ。今一時待ち給へ。夜昼我立ち添そひて守り奉もるなり」と聞えければ、「さては、母御前にてましますか。母御前にてわたらせ給はば、何とて命を生けさせ給ふらん。早はや命を取らせ給へ」と、祈念しきりにし給ひけり。

さて、海士イ小舟・釣舟通れども、寄りて言問ふ人もなし。五日と申す夕暮に、明石の海士、潮の干る間をうかがひて、漁あさりにとぞ出でたりけり。螺にじや榮螺さざえ・蛤はまぐり取りに沖へ出でたり。巖の上を見てあれば、女房のやうなる人こそ見えけれ。天人の天くだり給ふかや。かかる事こそいまだ見ね。凡夫とも覚えねども、怪しきに、舟さしとどめ、³つくづくとぞまぼりける。かの姫君、「かかるものは人にてはなきやらん。ただ今我を失はんとや」、恐ろしく思ひけれども、よくよくこれを見給ふに、さすがに人の形なり。姫君さめざめと泣き給ふ。海士舟漕ぎ寄せて、申すやう、「いかなる人にておはすれば、かかる島にただ一人おはするぞ」と申せば、姫君のたまふやう、「我は京の者なり。通る舟に捨てられてあるなり」と仰せければ、「まことに捨てられてましまさば、我らが住む所へ入らせ給へ」と申せば、「嬉しくこそあらめ」とのたまへば、「さらば」とて、海士が舟に乗せ参らせて、みぎはに漕ぎ寄せて、いだし、負をひ奉りて、己が岩屋へ入れ奉りぬ。次の日、上の岩屋しつらひて、別べちに据ゑ奉りて、主しうのごとくかしづき奉る事限りなし。

(注) ○ 祈念——一心に願うこと。

○ 螺——巻き貝の総称。

問 1 波線部ア「干」イ「海士」の読み方を、現代仮名遣い(平仮名)で書け。

問 2 二重傍線部 a「奉る」b「給へ」c「おはする」の敬意の対象を、次の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選んで、その番号をマークせよ。同じ番号を何度使ってもよい。

- ① 姫君 ② 母御前 ③ 海士 ④ 天人 ⑤ 凡夫

問 3 傍線部 1「なかなか海へ沈めたらば、かかるうき目は見じや」について、以下の問に答えよ。

(1) 傍線部 1 の現代語訳として、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 逆に、海に落とされ沈んだからこそ、こんなひどいことになったのだ。
② もしも、海に落ちることがなかったら、こんなつらい目にあっただけだろうか。
③ 中途半端に海に落とされ濡れてしまったので、こんな状況となってしまったのだ。
④ かえって海に落とされ死んでしまっていたら、こんなつらい目は見なくてよかった。
⑤ しっかり海の中程まで沈めていれば、こんな姿で生き残ることはないにちがいない。

(2) 「かかるうき目」の内容として、最も適切なものを次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 海で溺れ死ぬこと
- ② 前世で罪を冒したこと
- ③ 母御前に先立たれること
- ④ 髪が潮で濡れてしまったこと
- ⑤ 岩上で死にそうになっていること

問4 傍線部2「命絶たなんと、な思しそ」について、以下の問に答えよ。

(1) 「命絶たなんと」の「なん」の文法的説明として正しいものを次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 動詞の活用語尾＋助動詞
 - ② 助動詞＋助動詞
 - ③ 副詞の一部
 - ④ 係助詞
 - ⑤ 終助詞
- (2) 「な思しそ」を現代語訳せよ。

問5 傍線部3「つくづくとぞまぼりける」を現代語訳せよ。

問 6

本文の内容に合致するものを次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号をマークせよ。

- ① 姫君は、海士に連れて行かれて、夫婦として一緒に住むことになった。
- ② 姫君は、海士の家とは別に住まいを整えてもらい、丁寧にお世話されることになった。
- ③ 姫君は、海士に助けられたことをありがたいと思い、海士の従者としてお仕えすることになった。
- ④ 姫君は、海士の船に乗せられ、岩屋に祭られ、天人として崇められることになった。
- ⑤ 姫君は、母御前と別れ、海士と一緒に住むことをいやいやながら承諾した。

(下書き欄)

10

15

10

5